

特集

子どものための ステロイド外用剤のレシピ

特集にあたって

副腎皮質ホルモン(ステロイド)は、医療現場になくてはならない薬剤となっている。ステロイドを初めて臨床に応用したのはヘンチであり、1948年にリウマチ患者に投与して効果が得られたことは有名であるが、その始まりは1930年に発表されたハートマンの論文に遡る。ハートマンは、「アジソン病の患者にウシの副腎皮質抽出物の投与が有効である」ということを示し、この抽出物を「コルチン」と名づけていた。研究者のケンドルは、コロンビア大学を卒業してパーク・デービス社でホルモンの研究に従事していたが、この論文に着目し、コルチンから数種類の化合物を発見し、最も薬理活性が強い化合物を「物質E」と命名した。この物質Eは、パイロットに投与すると酸素欠乏症になりにくいという報告がされ、第二次世界大戦の最中であった米国で軍事利用を目的として国家プロジェクトとして研究が推進され、精製方法が確立した。ケンドルはメイヨークリニックに在席しており、物質Eの精製成功を聞いた同クリニックのヘンチがリウマチ患者に1日100mgを3日間連続して筋注し、症状の改善を認めた。このコルチンの基礎研究と臨床応用の成功が1950年のノーベル生理学・医学賞の受賞へつながった。このようにステロイドの開発は皮肉にも戦争との関わりが大きい。

ステロイドは強力な抗炎症効果や免疫抑制を発揮するが、重篤な副作用を発現することから、副作用の発現を抑え最大限の効果をを得るために

は適正使用が重要となる。この副作用軽減を目的として、ステロイドは皮膚外用剤、吸入剤、点眼剤および耳鼻科用剤など外用剤として多くの剤形が開発されてきた。ステロイドの副作用への対処の基本は、予防と早期発見・早期対処であり、これら外用剤の剤形の特徴や体内動態を理解したうえで、適正使用を図ることが大切である。そこで本特集では、ステロイドの外用剤の小児への使用を、剤形からと疾患からの両視点で、それぞれの分野の第一線で活躍されている経験豊かな先生方に執筆をお願いした。

ステロイドは、1992年7月報道番組「ニュースステーション」の特集の最後に、「ステロイドは最後の最後まで使ってはいけない薬」とコメントしたことからマスコミがステロイドへのバッシングを行った影響で、ステロイド忌避の患者らが根強く認められており、保護者への説明も重要である。これらの利用可能性ヒューリスティックに関してもエビデンスを含めて解説した。

目次をご覧いただければ一目瞭然であるが、明日からの臨床で役立つ具体的な内容が豊富な一冊となっている。本特集が、多くのステロイドの外用剤を使用する小児患者への適正使用の福音となることを願っている。

佐々木研究所 研究事務室長
大谷 道輝